

週刊 武四郎

第18号

2018年(平成30年)8月8日(水)
発行・松阪市

●毎月第二週は、
松浦武四郎と北海道に
ついてご紹介します

監修・松浦武四郎記念館



▲図① 納沙布日記より
(松浦武四郎記念館蔵)

武四郎さんが蝦夷地を探検していた江戸時代はレインコートもブーツもありません。どんないでたちで北の大地を歩いていたのでしょうか。
どうやらへ郷に入っては郷に従えで、アイヌの人々の知恵を借りたようです。霧の時は、ラワン藪という大きな藪をマンツのように羽織ったり、スカートのように腰に巻き付けて歩きました。全身緑色の藪のお化粧みたいな姿です。自身もへ化け物のような姿で歩く〜と書いています。この格好がよほど面白かった(?)のか、江戸に戻ってから友人の三浦乾也にその時

リアル探検スタイル



▲図② 石狩日記より (松浦武四郎記念館蔵)

の姿を描かれています(図①)。また、ある時は、熊の穴蔵に野営することもありました。これものちに友人の鳥霞谷という男に絵を描いてもらって『石狩日記』の図版にしています(図②)。ほとんど穴蔵に隠れている悪人か、洞窟に隠棲する世捨て人みたいです。明治二十六年(一八九三年)に当時の小学生向けに書かれた郷土史の本、『三重縣史談』の中には、どうやらこの



▲図③ 三重縣史談より
(国立国会図書館デジタルコレクション)

の図を元にしたと思われるイラストが載っています(図③)。今、北海道内には、つほど武四郎さんの銅像がありますが、みんな伊能忠敬や間宮林蔵と見分けがつかないような姿なので、本当はこんな風な藪の葉っぱの方がリアリティーがあって武四郎さんらしいような気がします。ちなみに、この洞穴の武四郎さんの絵を描いた鳥霞谷という人は、のちに写真術を修め、幕末明治期のプロカメラマンとして知られている人です。もともと

とは絵師だったので、武四郎さんは写真家になる前からの付き合いだったのでしょうか。

藪のマンツの絵を描いている三浦乾也は(イラストの右上に「乾也」という署名が見えます)、実は陶芸家としてもたいへん有名な人で、また一方で(今となってはあまり知られていませんが)造船の分野でも業績を残した人でした。さらには武四郎さんの義理のお兄さんでもあったのです。この三浦乾也については次の機会にご紹介しましょう。

松浦武四郎 (1818 ~ 1888)

三重県松阪市出身。幕末から明治にかけての探検家、著述家、蒐集家。蝦夷地(今の北海道)を6度にわたり探査し、アイヌの人々と交流を深め、蝦夷地の詳細な記録や地図を作成した。維新後、蝦夷地に代わる新たな名称として(北海道)のもととなる(北加伊道)を含む6案を政府に提案したことから(北海道の名付け親)と称される。



文・河治和香 装画・りんたろう 編集・細山田正人 デザイン・DOMDOM

●松浦武四郎を主人公とした小説『がいなもん 松浦武四郎一代』(河治和香著)が、小学館より好評発売中!

